

# 自然観察指導員講習会と関連して

## 三 浦 二 郎

みうら・じろう

1925年朝鮮京城（現ソウル）生まれ。  
京城師範卒業。樽前自然教育研究所主宰。少年時代から野鳥生態に興味をもち、日本野鳥の会には戦前から入会。  
野鳥を通して自然保護に情熱を燃やし続けている。

一九八一年（昭五六）八月八日から十日までの二泊三日の日程で、北海道では初の自然観察指導員講習会が、日本自然保護協会と北海道自然保護協会の共催で羊蹄山南麓の真狩村の道立羊蹄青少年の森一帯を会場として開催されることになりました。この講習会は、日本自然保護協会の認定制度として発足したもので、

一、指導員制度は、現在までの自然保護教育の分野、自然観察会などで蓄積された情報の提供、新しい研究や技術開発を進めるための有機的なシステムとする。

二、自然保護運動は、現在組織的な発足が求められており、自然観察会活動を自然保護運動の基盤的な活動として発展させる必要がある。

このため指導者養成は目下の急務であり、協会としても最大の力を注ぎたいということで発足したものです。

第一回は一九七八年（昭五三）七月、神奈川県足柄山々麓で開催されました。神奈川県というのは首都圏に隣接し、各種の開発行為が盛んな地で、失われて行く自然環境に危機感を抱いている所であり、それに対応するための自然保護運動の発祥の地でもあり、多くの秀れたナチュラリストを輩出しており、従って日本自然保護協会の前掲した理念に基いた講習会開催地としては格好の地であったわけですが。

その後各地からの開催要請があつて、首都圏から同心円的に開催地が拡大して行きました。そのうちに上級者対象の「指導者研修会」も開催されるようになりましたし、自然観察会の指導実施中の事故に対して「自然観察指導員賠償責任補償制度」も整備されるようになりました。

しかし、北海道でのこの講習会開催までにはなかなか至りませんでした。ようやく羊蹄山々麓での開催にこぎつけたのですが、それが通算して第二十六回ということですから、それまでの二十五回は本州都府県であつたわけですが。道内のナチュラリストにとって歯がゆい思いがあつて、本州での開催地で受講した人もあつた程度です。従つて、この道内での開催は、道内の自然愛好者にとつては渴望していたものであつたわけですが。

私は当時現職であつたので、本州での開催地の講習会参加はとんでもない状況ではありませんでしたので、羊蹄山々麓での開催は、私にとつても望みのことだったので。それに夏休み中の開催なので、その年の夏休みの予定にしっかりと組み込んでおきました。

私の夏休みは例年のことですが、その年もびっしり予定が入つておりました。先ず八月三、四日は標津町薫別小中学校を会場として毎年開催されてきた東京の私立高校の希望者による「北海道大 自然教室」のうちの野付半島の自然探勝ガイドです。翌五日は釧路町理科サークルの自然教育指導、そして六日には江別市で開催される民教（北海道民間教育団体連絡協議会の略）の全道集會に参加してから真狩村に行くこととしておりました。

民教集會には、確か公害教育の分科会だつたと思いますが、分科会の共同研究者の神山桂一先生から、道東方面での取り組みについて提言してほしいとのお手紙を頂いておりました。その当時、知床横断道路の建設問題に深く関わつておりましたので、その報告をする心づもりをしておりました。

ところが、野付半島のガイドを無事了えた日の

夕方から雲行きが怪しくなり、夜には土砂降りの豪雨になり、翌朝のニュースでは各地で災害が発生しているようでした。特に主要道路は随所で寸断されており、とても出かけられる状況ではないようです。特に道東から道央、道南に向けての走行は、狩勝峠、日勝峠が不通ですべてを断念せざるを得ないようです。釧路町理科サークルとの約束はとりあえずあきらめ、六日朝出発と予定していたが、台風十二号による大洪水が報せられていた江別市での集会参加は断念、一日様子を見ることにしたのです。その間に日勝峠が片道ながら開通したという情報が入り、七日早朝、根室の小林秀雄さんと、高田勝さんの風露荘に投宿していた東京の学生綾小路君を同乗させて中標津町計根別中学校の公宅を出発したのです。途中は道路情報を確かめながら迂回路をたどっての走行になりましたが、日勝峠を越してからは割合順調に走れるようになりました。しかし、勇払あたりから渋滞が始まり沼の端あたりからは一寸刻みのろのろ運転になりました。何せ道東と道央圏を結ぶ路線はこの道路しか開通していませんですから当然です。

そして仕様こともなく眺めやる勇払原野は完全に水没して果てしない泥水の海と化しております。この時の大洪水が契機となって後の千歳川放水路計画策定となったもので、私としては講習会参加と共に、その後の放水路計画反対に立ち向かう気力の原体験でもあったわけです。台風がもたらした大洪水は、決して千歳川と石狩川の合流地域だけの災害ではなく、美々川・遠浅川流域や勇払原野一帯にも大きな災害をもたらしたのです。千歳川の流れを逆流させて太平洋側にもってこよ

うという千歳川放水路計画はあまりにも身勝手だと思ふのです。治水対策はその水域で処理するのが大原則であるはずのものを、あえて流れを変え大規模土木工事をやる必要は、治水対策に名をかりた北海道開発局の生き残りのためのものであろうと直感したのは、その後の千歳川放水路計画推進の推移を見ても明らかです。

さてそうやって真狩村近くの喜茂別までたどり着いて飛び込みの宿について一夜を明かし、八日からの講習会に参加したわけですが、全道からの参加者のうち十名ばかりが交通網遮断で参加できなくなったのは残念なことでした。

講習会は、日本自然保護協会研究員の工藤父母道さんの進行で進められました。工藤さんは小樽市の出身で、私とは前述の「北海道大自然教室」開設以来おつき合いを頂いており、気安さもありました。

講師陣は協会理事の金田 平・青柳昌宏両先生と、地元講師として地質の北海道自然保護協会々長八木健三先生、植物の北海道自然保護協会々長宗像英雄先生、野鳥の道庁自然保護課の梅木賢俊氏が加わり、理論と実技がびっしりスケジュールに組まれました。

特に夜の講話は、金田先生の自然保護の理念を踏まえた自然観察指導の理論づけの講義は感銘深いものがありましたし、また青柳先生の満月のスライドはオーストラリアで撮影されたものだそうで、月のクレーターが作る北半球ではウサギのもちつきに見える黒い影が逆に見えており、物事を正面からだけでなく、反対側から見ると自然観察では必要であろうというお話は示唆に富み心に残るものでした。ついでのお話では、オースト

リアで使われる地図は南が上になっているそうです。現地講師の八木先生の地質、宗像先生の植物、梅木氏の野鳥の指導は懇切なものでした。最後の第三日目は、受講者自身がコーディネーターになったの指導実習で総仕上げになりました。ただどうしても自然解說的になる傾向があったことについては、工藤さんや講師の先生方から注意を受ける状況でした。講習会を通じて「種名にこだわること、受講生にはまだよく浸透していなかったからでしょう。

この北海道第一回の羊蹄山々麓の講習会のようすについては「樽前ガロウのほとり」で詳しく記述しておりますので参考にしてください。(三浦自費出版)

第二回目は私の当時の地元であった中標津町養老牛温泉で開催され、中標津町役場の奥地さんと協力して精一杯お世話させて頂きました。講習会は成功でしたが、講習会を閉講した時点で猛烈な雷雨に見舞われ、第一回目の時とは逆の悪天候になったのは皮肉なことでした。

その後講習会は白金温泉やニセコで継続開催され、道内に多くの自然観察指導員の有資格者が誕生しました。第一回目の閉講後、指導員連絡協議会の結成が申し合われたのですが、実体はなかなか実現しませんでした。しかし講習会も回を重ね資格者も増加したこともあり、札幌の阜山俊雄さんの肝入りで「北海道自然観察指導員連絡協議会」が結成され、第一回の北海道自然観察指導員研修会が春まだ浅い札幌定山溪の豊羽自然学園を会場に開催されました。その後も毎年各地で会場を移動して指導技術向上のための研修を積んでお

ります。一九九三年の札幌円山での研修会は、金田先生をお招きして充実した内容でした。

また札幌市民を対象とした親子自然観察会を主催し、豊羽自然学園を会場にした一泊二日の自然観察会を数年実施しましたが、参加者輸送に難点もありましたので、最近は整備された滝野自然公園をフィールドとして開催しており極めて好評で、夏休みに入った子ども達とその親達に定着した行事になっております。

月例の行事としては、円山公園での観察会も在札の指導員会員の指導技術の向上に役立っております。

自然観察指導員講習会の道内開催は一時休止されておりましたが、一九八八年栗山町で再開され、八九年は当麻町、九〇年は江差町、そして九一年には名寄市で開催され多くの指導員が誕生し、全道各地での自然観察会の指導に当たっております。写真はウトナイ湖畔での冬の自然観察会のスナップで、寒い冬にも拘らず多くの参加者があり好評でした。

その後三年間講習会開催が休止されておりましたが、来年度はオホーツク側の会場での開催が予定されております。また新しい自然観察指導員のなかまが増え、本協会々員の増加が期待されます。最後にこの講習会の開催時期について提言を試みます。北海道での講習会は伝統的に八月開催となっておりますが、八月という時期は北海道では最も生物活動の盛んな時季なので、それなりのメリットはあります。しかし第一回、第二回の時のように天災が襲来するおそれがないわけでありません。もう一つは学校の夏休み中のことなので、学校教師の参加が容易であろうという配慮があっ



たことも事実でしょう。しかしそれが固定されたものになったのではマンネリ化を招くことになりかねません。特に野鳥観察の時期としては不向きです。野鳥が一番多く出現したのは、私の経験では第一回の羊蹄山麓での開催の時梅木氏の指導もよかったでしょうが二十種ばかりが観察されました。特に絶滅に瀕しかけているエゾライチョウの親子連れが芝生の中を横切ったこと、クマゲラの食痕と姿が確認されたのは感激でした。しかしその後の開催地では淋しいもので、十種にも満たない状況でした。野鳥は環境指標動物として最もすぐれており、自然観察の対象として好適で、

それを講習会のメニューに加えないという手はないと思います。野鳥観察を講習に取り入れるとすれば五月から六月初めが適期でしょう。またその時期は植物や昆虫の活動もいきいきしております。一方、秋の開催を考えたもよいのではありますまいか。体育の日を中心にする、北海道では鳥の渡りの最盛期でもありますし、紅葉や草木の結実期、それにきのこもメニューに加わります。

また夏休み中をはずすということは別の意義もあります。最近の学校では、環境教育が盛んにとり上げられようとしております。ひと頃のように高度経済成長の尻馬にのった自然疎外の教育のあり方に反省が加えられ、ようやく自然や環境問題に目を向けるようになりました。ところが教育の現場では、これらに対するノウハウがあまりにも不足しています。それは教員養成大学を始め一般大学においても、これらに関連した講座があまりにも貧弱なのが現状だからです。

この現状を打開するには、自然観察指導員講習会を現職教師に受講してもらうことが極めて有効だと思っております。今までの講習会にも学校教師の人が多く受講しておりますが、それらの人はよほど意識の高い、しかもボランティアでも自然観察会の指導をやるうという人が多かったと思われまします。しかしこれからは環境教育(自然保護教育)推進の担い手として多くの人材が育ってほしいものです。来年度から学校の週五日制も隔週ながら実施され、夏休み中だけでなく受講の条件が整うわけですので、検討してみたいかがでしょう。